

# 九州大学

Kyushu University

## 国内屈指の学術研究都市へ 100年後も持続できる 伊都キャンパスの整備

2011年に総合大学としての創立百周年を迎えた九州大学。伝統を踏まえつつ、次の時代に対応すべく、長い年月をかけて新キャンパス計画が進められてきました。広大な敷地を舞台にしたプランには、この先、100年後をも見据えた壮大かつ柔軟なキャンパスの姿が描かれています。



提供：福岡市  
撮影：福岡市消防局

### 時代の変化に対応できる フレキシブルな大学へ

1991年に福岡市西部糸島半島への移転を決定した九州大学は、教育と研究の理念に基づく諸活動の実践空間の実現に向けて「新キャンパス・マスタープラン2001」を策定しました。そこには自然や歴史的資源と共生する「伊都キャンパス」の姿が描かれています。キャンパス移転は2005年から始まり、すでに工学系などの移転が完了。2019年までに理学系、文系、農学系等が移転する予定です。伊都キャンパスは275ヘクタールもの広大な空間で、新たな学術研究都市の中枢に位置づけられます。センター・ゾーンには歩行者専用のキャンパス・モールを軸に、研究教育施設や生活支援施設、課外活動施設などを配しています。また、ウエスト・ゾーンには、工学系の研究教育棟や実験



坂井猛 本部 新キャンパス計画推進室 教授・副室長／大学院人間環境学府・工学部建築学科教授。「学部が増えてタコ足状態だったキャンパスの分離問題も、伊都キャンパス設置によって解消されつつあります。全学がしっかりと学べる環境が整いましたので、しっかりと教育しなければならぬと実感しています」

施設を整備。ゆったりとした空間デザインが、多様な活動を支えます。「大学に対する社会のニーズは変化していきます。それに対応するには自らが柔軟に変化していかなければなりません。これが、九州大学が最も大きく変わろうとしているポイントです。本学は日本で初めて学府・研究院制度を導入し、教育組織と研究組織を分離することで柔軟な連携を実現しています。新キャンパスでも学生と教員の部屋の構成を工夫し、新しい分野にも対応できる空間としました」（本部 新キャンパス計画推進室 坂井猛教授・副室長）

伊都キャンパスは、生命医療科学の拠点である「病院地区」、先端的デザイン拠点である「大橋地区」、先端科学の拠点である「筑紫地区」と共に九州大学を構成する4大拠点の一つであり、総合科学の中枢としての役割を担っていきます。

### 地域や時代に添いながら キャンパスは生き続ける

今回の整備事業は、研究成果が上がることで、学生が快適に学べる環境であることに力点が置かれています。坂井教授は「学生の住まいや交通施設などのインフラは地域と連携して作っていかねばなりません」と語ります。

「学生、教員、職員、さらにサービス施設に従事するスタッフも含めると2万人近くが集結することになります。都心型の箱崎とは異なり、キャンパス内で過ごす時間が長いことから、学習、食事、スポーツなど日常生活全般が十分行えるように各施設を整備中です。あらゆる場面で選択肢を増やすことが、学生生活を豊かにするうえで大切なことだと考えています」

住まいについては今夏、「ドミトリー3」が完成し、同じく完成したばかりの国際寮「伊都協奏館」と併せて1246名分を確保。学生の賑わいがつねに感じられるキャンパスの実現と周辺地域とのつながりを考慮し、学生の生活拠点や大学全体で使う建物は街に面するキャンパスの中央に配置しました。多数の学生が入居し始めたことで、近隣住民からも「街に若者がやってきた」と喜ばれています。

伊都キャンパスは「開かれたキャンパス」として24時間自由に入入りで



アカデミック・ゾーンの骨格の構成概念

きます。扉を設けず、図書館等の施設は市民にも開放していますが、セキュリティ対策には万全の配慮をしました。また、自治体や企業の協力も得ながら、地域住民と伊都祭などの取り組みを推進し、産官学が一体となった街作りが進められています。キャンパス計画において重要なことは、50年先、100年先を見通し持続可能なプランであること。九州大学では「フレームワークプラン」を策定し、土地利用と動線を踏まえつつ将来の変化に対応させ、持続可能なキャンパスを目指しています。坂井教授は「キャンパスは生き物ですから」と締めくくりました。